ベトナム産ライチの収穫が始まり日本で関心が高まる

FreshPlaza　2025年5月22日

駐日ベトナム貿易事務所の貿易顧問であるタ・ドゥック・ミン氏は、トゥオイチェ新聞社（ホーチミン共産青年団機関紙）本社を訪問した際、ベトナムからのライチの輸入について多くの日本企業が同事務所に問い合わせていると述べた。同氏は、「彼らはライチの成熟具合と、日本への出荷可能時期について尋ねている」と述べ、ベトナム産農産物への関心が高まっていることを強調した。

日本市場では安定した品質と日本人好みのパッケージが求められ、重要でありながら挑戦的な輸出先である。2025年の最初の5カ月間は、安定した政治的関係と両国国民の強い絆に支えられて、ベトナムと日本の二国間貿易はプラスの成長を示した。

農林水産物等ベトナムの主要品目の輸出は好調であるものの、ミン氏は製品によって性質が異なると指摘した。農産物や水産物の輸出は、より安定した木材製品の輸出とは異なり、季節や気象条件の影響を大きく受ける可能性がある。例えば、ライチは昨年、低い収量と高い価格のために輸出上の課題に直面した。しかし、今年は有望な需要の兆候が見えている。多くの日本企業が積極的に情報交換を行い、早期に輸入計画を準備している。

他のベトナム産果実も目を向けるに値する可能性があり、果皮が緑色でない品種のザボンは日本でさらに市場に浸透する可能性がある。日本の消費者は、すでに地元のスーパーマーケットで目にするカッチュー（Cat Chu）種のマンゴー等の熱帯果実を好んでいる。さらに、ドライマンゴー等の付加価値のある加工品を拡大することは、年間を通じた需要への対応に役立つ可能性がある。

日本の高度な保冷技術は、果実の鮮度を収穫後6カ月から9カ月の間保つための解決策を提供しており、ベトナムでの利用の可能性が問われている。ミン氏は、多額の投資が必要ではあるものの、ベトナムの農家や企業が収穫後の物流への投資に動く必要性を強調した。

ベトナムがライチ収穫の最盛期に入る中、総生産量は30万3千トンを超えると推定されており、生産量の増加に合わせた輸出の準備が行なわれている。日本等の市場に輸出する産地と梱包施設は、定期的な監督の下で認可を受けている。ミン氏は、要求の厳しい市場で競争力を維持するため、品質、ブランディング、テクノロジーにもっと投資するようベトナムの企業にアドバイスしている。

出典: tuoi tre news